
PARTIAL TALE TOKISAME

伊東 光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

PARTIAL TALE TOKISAME

【ノード】

N3877D

【作者名】

伊東光

【あらすじ】

あきれ×苛立ち×失望＝殺意。心の中の数式。探偵は連續殺人事件を解き明かすことが出来るのか。普通の少年と変わった探偵のお話の一部分。

「いつから僕が犯人だと気づいたんですか」

時雨が放課後、静まり返った図書館でひとり本を探していくの^{しぐれ}ことだつた。「今の学生さんは偉いねえ」と自分の倍ほどの年齢である、鯰^{なます}に後ろから声をかけられた。

「鯰さんじやないですか。どうです、犯人分かりましたか」

突然、鯰に声をかけられ戸惑つたものの、何とか時雨は平静をよそおい切れた。

「俺が、学生のこ^ろなんて図書館自体が無かつたからなあ。いや、さすがにあつたか。それにしても、いきなり後ろから話しかけられるつてのはどんな気分なんだ」

「ハハ、鯰さんの声は特徴ありますからね。すぐ分かつちゃいましたよ」

当たり障り無く切り返しつつ、もう一度「分かつたんですか」と鯰に尋ねた。

「分かつたよ。当たり前じゃねえか、楽勝すぎ」

その言葉に、まさかとは思いながらも時雨は黙つて次の言葉を待つた。

「犯人はお前。凶器は、ええと、あれだ、ほらあの丸くて先つちよがさ、「

言葉に詰まる鯰に時雨はあきれつつも答えを明かした。

「そう、その通り。それだ、それ」さも満足げになつているこの男を見ると、時雨はこの人は何をしたいんだとむりにあきれたりの連鎖。あきれの二乗だ。

「で、何が根拠で僕が見事、犯人に選ばれたんですか」

「何だつていいだろ。分かつてるヤツに説明するのは、時間の無

黙だぞ」

「ハア、くだらないなあ。ろくな根拠もなしで、いたいけな中学生を連續殺人犯にしてしまうんですか、あなたは」

「なら、あれだ。あれが根拠だ」

それの次はあれですか。時雨は鯰との会話に若干の苛立ちを感じる。

「あれって何ですか」

「俺がさつき凶器が何かつて説明しようとしたときこそ。お前、すぐに対面ちまつたじゃないか。凶器が何か。これでいいだろ、な」

あきれと苛立ちが徐々に募りつつも、こみ上げる感情を抑え会話を続けた。

「言い分けないでしょ」いつのまにか握り拳になっていた手を、さらにつく握った。

「しょうがねえな。じゃ、一回だけ説明してやるよ」

「いつから僕が犯人だと気づいたんですか」

鯰の推理を聞き終わつたとたん、時雨はそうつぶやいていた。きつく握つていた拳を開く。うつすらと、手には汗がにじんでいた。

「で、僕をどうします」

自信の壁が、鯰の起こした地震によつて打ち碎かれた。そんな感じだつた。鯰つて地震を予知するだけじゃなかたつて、と心の隅に幼稚な疑問が浮かび上がる。

「どーしようかなあ」

鯰の小ばかにしたような言い方に腹が立つ。と、同時にある種の失望を感じる。

あきれ×苛立ち×失望＝殺意の式が出来上がる。

ポケットの中の凶器に触れる。後は、少しのきっかけで頭の内部で爆発が起つるだろ。それが、連鎖反応して広まっていく。収まるころには、苛立ちの原因はもう存在しない。残骸が残る程度だ。

「ふん。ジーもしねえよ」

鯰の言い方に、時雨への恐れから来る怯えや媚びが感じ取れなかつた。ましてや、時雨を馬鹿にしているわけでも、同情しているわけでもない。良く言えば、達観している。悪く言えば、鈍感なのか。どちらであれ、時雨はただ驚くだけだった。

「俺は、警察でもなけりや裁判官でもない。それに、弁護入じやないつてことも言える」

そこで一呼吸おき、鯰は続けた。

「俺は、探偵だ。探偵の役割は事件の真相を語ることであつて解決することじゃない。ショーケ・ジーテイルも言つていただろうが

「誰ですか、その人」信じるのかい。鯰の言つこと。否。ただ、苛立ちと失望は消えた。自信満々に語る鯰を眺めていたら、本物の鯰を連想した。本物も偽者もどこか物事を、大げさに言えば世界そのものを達観している。鈍感のような気もするが、地震を予知できるぐらいなのだ。実際は鋭い感覚を持っているのかもしれないな、と時雨は思う。そんな自分に少しあきれた。

膨らんだ風船を割ろうと、いきおい良く針を刺した。すると、割れるどころか、開いた穴から少しづつ空気が抜け出していつて小さく、しほんでしまった。そんなところだ。

(後書き)

推理小説と言いながらも、全体の事件と使われた凶器、それらを解き明かす推理も、そしてその後どうなったのかも分からぬようにさせていただきました。社会問題を投げかけるのが目的の小説でも、特には無いです。足りないピースを読者の方が勝手に作り出して好きなようにはじめ込み、楽しんでほしいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3877d/>

PARTIAL TALE TOKISAME

2010年10月28日03時56分発行